

私の保育



関 治 子

私が幼稚園の幼児と接するようになって、何回かのクラスを受け持ち、送り出して、現在は四歳児のクラスで毎日を過ごしている。この「私の保育」を書くに当たって、私は第一に今の幼児たちとのことを書くかと思った。

次に今までに書かれた新進の方の「私の保育」を再び読ませていただき、何れもその真摯な態度には共感を感じた。そこで私は、記憶の新たな現在の幼児のことを書きながら、以前の幼児のことをおもい浮かべることによって、そこから共通した私の保育というものが浮かび出て、「考えてみる」よすがとなるのではないかと考えた。

◆ 保育の経験と心がまえ

保育の経験がいくらあるといっても、実は新しく迎える時の気持は、初めて受け持った時と変わらない。どんな幼児と出合うか、そしてどういうすべり出しをするのか、期待と共に不

安とおそれ（懼）をもって臨んでいる。むしろ、前の経験を通して倍加した場合を想像して心配になってしまう。そんな時はじめのころならばかえって、一つ一つの場合が、新しい出来事であるので、いわばこわいもの知らずで勇敢にぶつかっていったかもしれない。今から考えると、よくそ先輩や、私より年上のおかあさまたちは信頼し、協力してくださったものと、あらためて感謝をする。

名札をかいいたり準備をしながら、新人児の名前を覚え、だんだん頭にはいつてくる。新人の日の朝、教師と幼児との第一の出会いがある。名前をよびかけてあげると、幼児の驚きと心の中の喜びがそこで起こってくる。こうした対処のしかたには、確かにある程度熟達してくる。しかし、初めの出会いが、いかにこれからの教師と幼児との結びつきのかなめになるかということは、心がまえの上で経験の有無を問わずしなくてはならない点です。そしてこの時の印象は、その幼児がこうした特別な場面で示す態度としてあとで参考になることが多い。反面、日常の生活では、この日にみせたようすと異なった面をあらわす幼児もいる。

新しく始まった幼稚園生活になれにくい幼児を受けとった場合に、経験の浅い間は、幼児の気持になってあげようとは思っているものの、やはりできれば早く適応させてあげたいと思うあまり、

どこか性急になってしまっていた。不安をもつ幼児には何が不安なのか、またようすはほぐれてきても心の窓をなかなか開いてくれない幼児には、どこにその原因があるのかを感じとるのは急いでよいが、行動に移す場合にはあせる必要はない。そういうことを体得するには、経験というより、自分自身の成長ではないかと思うのだが……。

◆ 私の保育の特徴

幼児は似かよったタイプに類別することはできても、同じ幼児というのはまずいない。兄弟を受け持ったこともあるが、これまで随分とちがっている。つまりこんなに十人十色の幼児が集まることができる一つのクラスも、それぞれふんい気というものが生まれてくるであろう。そのふんい気は、ふり返ってみても、無邪気なクラスあり、面白い個性的なクラスあり、粒のそろったクラスあり、牆の強い人の多いクラスありで、それぞれ独特の特徴がある。これは幼児の側からの特徴であるが、共通に私というものが介在しているのであるから、きっと私のクラスの特徴というものがあるに違いない。これはかえって私自身にはわからず、他人の目からみた方がより適確につかめるかもしれない。自分で、いささか心していることを考えつつ、反省してみたい。

そのクラスによって、こんな点に力を入れていきたいと方針

ができる。時代的な背景と幼児のなりたちによって、多少ちがった方針があげられよう。しかし、大きな精神的よりどころとなるものは、年によってそんなに変わっているものではない。たとえば・ひとりひとりが気持を充分に開いて集団生活に臨めるようにする。・その個性のよさを失わずにさらにひっぱり上げる。・社会生活の最低のルールが会得できるようにする。

・人間関係の中で信頼を知り、情緒的に美しさ、やさしさ、思いやりなどの気持を充分に知らせる。・正義感や真摯な態度をもつ。などなど私の理念というものがあるつもりだ。しかし、こういう理念をもったにしても実際の幼児についてはどうであろうか。そういうことが少しはしみとおったと思うこともある。たとえば、教師と幼児との信頼とか、あるいは気持を開くということになるが、近づいていって接した場合、こちらが心から接していると幼児にはこんな反応がでてくる。

・「ぼく、先生の家のお隣りに引越したい」

・「先生は今ごろどうしているかな」

「ぼくね、およめさんきめたんだ。――誰？――先生だよ。でもなってくれるかな――」

・「先生はかわいい子ですね。かわいい」

これが、友だちとの関係になると次のようなことがあった。ある時お家ごっこをしていて、私は赤ちゃんにさせられた。

「お兄ちゃま、外に遊びにつれてってー」こんな言葉を私が言ったあとしばらく男女児が一しょにあそんで、お兄ちゃまお兄ちゃまと言って、新たなグループの構成や、お互いの間に親しみが増していった。怪獣ごっこにあけくれている中に、表面は他愛ないが、心の伴った関係が開け、つづいている。

個性をさらにひっぱってあげようと思うと、ずっと以前にこんなことがあった。

非常に元気がよくどうかすると乱暴と思われる幼児がいた。しかし実際には非常に気弱なところがある。彼は日常どうしても落ちついていられない。クラスの中で、この子はこんな子だとありがたくないうるを押されること―これは私にとってどうしてもさせたくないことの一つである。そのため、私は注意する時は皆の前でプライドを傷つけるような方法はとらない。個人的に注意する。そして、クラス全体で気をつけようということは、皆で約束することがある。彼は運動の面でもとても能力をもっていた。小学校との合同の運動会の時、小学校の人への応援ぶりは本当に夢中だった。その熱中ぶりに、そしていつにない集中力に私がおどろいた。

「こんなに一生懸命応援してあげるといわね」という賞讃は、他の幼児たちも大いに共鳴してくれた。そんなことを機会に、その後リレーなどを通して、ただ腕力が強いという印象か

ら、リーダーとしての尊敬を集めるようになったのである。

次の例は、もう一つの私のしたくないことである、問題児をつくりたくないこと―である。

入園後ほとんど口をきかない幼児がいた。何か聞いても「エ？」と首を曲げてき返すだけが精一杯である。大抵つたっている。他の幼児のあそびを見ているが絶対加わらない。しかし、内面は非常にしっかりしていて勝気であると私は理解していた。ある日お母りの前に自分の腰かけようと思っていたいすに他の幼児が同時にすべりこんできた。彼女は言葉では、説明はしないし不満もいわない。しかし、頑として他のどこにも腰かけず、どうしても妥協しない。帰りの列では足をどたんと片足出し、片足はひきずり、何ともがまんならない態度で帰っていた。

朝早く父親と登校してきておもしろしをしていて、おひるすぎまでだまっていたこともある。父親も、子どもにいろいろ話しかけないうるしく、そのことをつまらないと母親にもらしたそう。他の幼児からきいて母親はこんなようすを知り、「こんなだとは思いませんでした。問題児ですね。家ではよく話すんですよ」と心配している。しかし、家では弟相手に幼稚園でまゐるでしてきたかのようにしてあそんでいるし、よく話すという。

私は問題児などと母親が思いこむのはやめましようということ
を話した。家でのようすを聞いて私はこれは大丈夫と思ったか
らである。しかし、内心では全く心配ないわけではないのだが、
周囲からそう思わせていくのが一番危険だと思った。問題児を
つくってしまったはいけない。これは私の持論である。

彼女はしばらく目でみて参加している段階があったが、私は
時折他の幼児と一緒に山に草つみにいくなどというようにし向
けて、時折は一緒に行くようになったことと並行して、じつと
り何日か一緒に仲よしになって過ごした。こんな間に笑顔が
みえてきはじめた。そして、二人の間で明日はおべんというの時
お隣りにいくというようなことの約束をもったりした。次の段
階で、私が少し彼女から離れて忙がしく動き回っていると、彼
女の方からずつとくっついてくる状態がつづいた。こうなれば
と私も喜んでいたところ、六月二十六日のことだった。私に小
さい声で「幼稚園ね、お家より気に入ったの」と言うではない
か。私はこれは母親の言葉かと思ったのだが、あとからそうで
ないことを知ってびっくりした。一学期が終わって夏休みのあ
と、どのようになるか気になったが、かえって私が気にしてい
るようすをみせないようにしてみた。心配なく、一学期の終り
と同じようにすべり出した。やがて友だちとあそびだして、私
がぬけても、残ってあそべるようになってきた。そして、その

中でトラブルが起こっても、持ち前の強さで泣いてもがまんし
ている。そんなことを味わっていくうちに、十月になると朝早
くくる彼女は、私に今までの最低限の受け答えから、会話体か
らついに、文章となり、今ではしつこいくらいよく話すよう
になった。

そんなかずかずの出来事をふり返って反省してみるに、こん
な理念をもちつつも、私のクラスの特徴は、結果的にどうなの
であろうか。私が比較的男児的なあそびなどに抵抗感がないこ
とから考えて、活発で子どもらしいかもしれないが、反面がさ
つな所があるかもしれない。また私に粘り強さが足りないため
（「徹底的に幼児に強要できない」）幼児にそういう気持が欠
けているかもしれない。この機会に、こんなことをあらためて
考えてみたのである。

幼児は家庭から離れてはじめて親身につき合うおとなが教師
である。幼児は実によくみている。私はその一端を知って、水
山の一角にあらわれない面でどんなに多くの影響を与えている
かと思うと、責任を感じおそろしくもなり、また「先生よ！し
っかり！」と励まされねばならなくなる。

最近、特に幼児の言葉がよくない。これは、まだ発達がそこ
までいいないこともあるであろうが、家庭や社会の影響も
ある。しつけということもさることながら、日本人は日本語

のよさを話す必要があると私は思うので、私は幼児の前でことさらに美しく話してもらいたい言葉で話している。また、言葉は感情を伝えるものでもあるのだから、言葉を美しくしていくことによって感情も美しくなっていくってほしいという気持がある。近ごろはテレビの影響がとて強く「オレ」「お前たち」これで全生活がいきかぬない。「アンタ」「行ってくるよ。そうだよ」これらが方言としてあればまた話は別である。私は「○ちゃん、行ってくるわねってやさしくお話できたわね」などと賞讃することによって幼児たちの中で美しい言葉で話し、しらせることに努めている。ある時「あーあ、うちのパパはいやになっちゃうわ。オレオレっていうんですもの」思わずほえ込んでしまった。

ある母親に「先生は何か子どもに頼む時にすみませんけれどとおっしゃいますね、子どもが先生のまねをしているんですよ」といわれた。本当に、幼児は一挙手一投足どころかこちらの気持の中まで知っていることがあると思うと私は幼児を教育しているのではなくてされているのだと思うこのごろである。

◆ 保育の問題点

精神的よりどころの外に、内容的な面にもふれねばならないと思う。ずっと共通していることは、幼児がたのしみ充実した生活を過ごせるようにという点である。しかし、方法となると、

何回かの経験の間に、異なった面もある。私の考えでは、教育は効果を急ぐあまり教師の満足のための保育であってはいけないと思う。しかし幼児の伸びる芽を伸ばすということを尊重するあまり、教師の役割や方法のあり方を見失ってはまた大変である。私は、方法については、回を重ねれば重ねるほど、迷いを感じるのである。

幼児は何しろ実際に生活をしている。それならばその事実の通り、実生活の必要からはいって、自然に保育していこう。このことに何度も自問自答してみた。

今幼児の中には「仮面ライダー」がまん延している。そのはしりのころだった。ケーキのあき箱の底をぬいてあごひもをつけセロハン紙でメガネの部分をつくってかぶって出かけていく。他の幼児もあそびに必要なものを紙その他でつくってグループの中に入っていく。彼らにはつくったものはあそびの必需品であって、かざってもらう必要はない。べたべたとくっつける段階から必要に迫られて、少しずつ工夫をしていくようになっていく。

ままごとに必要なバッグやおかね、お医者さんごつこの救急箱、虫とりにいる虫かご、これらはおとなから見ると、つたないものだが、必要な点は、用がかなえられるようにできている。もちろん相談にのってあげ、手をかすこともしているが――。

サッカーをしていて、私はピツと笛を吹くまねをしていた。すると、ちょっと待ってねと一人の子どもがへやにはいって笛をつくってもってきた。音はしないのだが、形には苦心のあとが見られた。ゲーム自体は、まだすぐにボールを独占したがりたりしているが、こういうことで、自分たちのあそびを自分たちの力で心豊かにしていく経験を大切にしたい。

今、レコードを自分たちでかけて、劇をしたり、まりつきをしたりしている。そこに、ハンドカスタ、タンバリン、トライアングル、たいこ、鉄琴をおいて、音を出してみている。たいこをあき箱の上において、よりやりやすく工夫し、「お兄ちゃんの学校の音楽会やろうよ」などと試みている。夢中になつてうたつて遂に合唱になつたテレビのうたをテープにふきこんできいてみる。「次はちがう歌」と幼稚園で知つた歌を歌う。また、こんなことから8ミリのあきリールでテープレコーダーづくりが始まる。このように、いろいろな内容を幼児に密着した形ですすめていきたいと考えるのである。

私たちが計画をたてる時に、幼児のようすをみてと思うが、とかく計画が先行してしまうことはないだろうか。何回かのクラスをもってみて今、この幼児たちには、何時、何が必要なのかということが、幼児の要求によってみえてくることが少しずつわかつてきた気がする。たとえば、片づけの時のへやの掃除

やおべんとうのお盆くばりなどの手助けは教師から幼児中心へと動きつつあり、幼児の中から今その気運が盛り上がってきている。この過程を経た上で、役割もつくっていく時期はもうすぐであろう。

いつか、へやいっぱいにあそび道具がひろがって、今まさにあそびもたけなわだったことがあった。この日天候に恵まれており、園外保育への準備の気持もあって、年長組と近くのグラウンドに出かけることになった。十分で片づけられたら一緒に連れていってくださるのよということで、どうしようかたずねてみた。その次の瞬間は、まるで映画の回転数がちがつたかのように、皆でこまねずみのように動き出し、あつという間に見事に片づいたことがある。皆のその時の満足感！をおもい出す。時にこうして皆で一致協力して目的に向かうこと、これも日常の気持が通じ合っていればできるのではないだろうか。また教師のもつふんい気も大切な要素と思える。

今、保育に対する定見が定まらず、これでいいのかと迷いつつ保育している。不完全なところは何とたくさんあるのであらうか。しかし、幼児との場面において、つくられたものでない自然な生活態度で、一生懸命であるという姿を保ちつけていきたいと考えている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)